

病虫害発生予報 第3号(6月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所

＜予報の概要＞

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	いもち病 ヒメトビウンカ 縞葉枯病 ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ イネミズゾウムシ	並 並 やや少 並 並 並 並	野菜全般	ミカンキイロアザミウマ シロイチモジヨトウ	並 やや多
			カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアザミウマ アブラムシ類	並 並 やや少 並 並 並
ウリ科野菜	モザイク病 べと病 褐斑病 うどんこ病 疫病 つる枯病 炭疽病	並 やや少 並 並 並 並 並	カキ	うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 カキクダアザミウマ チャノキイロアザミウマ フジコナカイガラムシ	やや少 やや少 やや少 やや少 やや少 やや少
			モモ	せん孔細菌病 カイガラムシ類	多 やや少
野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類 ミナミキイロアザミウマ	並 並 並	果樹全般	カメムシ類	多

気象予報

1か月予報（予報期間 5月26日～6月25日 大阪管区气象台）

＜予想される向こう1か月の天候＞

期間の前半は、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。期間の後半は、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並の確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）＞



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

	月平均気温(平年値) (℃)	月降水量(平年値) (mm)
6月	和歌山 23.0	和歌山 188.6
	潮岬 22.1	潮岬 351.9

I. 水 稲

1. いもち病（苗いもち、葉いもち）

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 6月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 低温、日照不足、長雨が続く条件で発生しやすい。

② 県南部の早植え地域の常発地では気象条件に注意し、発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。

③ 県北部、県中部の普通期栽培地域では、「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」などの罹病性品種を作付けする場合には育苗箱施薬剤を施用する。

④ 田植え後の余り苗を水田に放置しない。

2. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

（1）予報内容 ヒメトビウンカ 発生量 並

縞葉枯病 発生量 やや少

（2）予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平成0.1頭）、上富田町0頭（平成0.1頭）、那智勝浦町1頭（平成0.1頭）であった。

② 県北部におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、和歌山市2.5%（平成10.8%）、かつらぎ町1.6%（平成13.4%）であった。

③ 県北部および中部の本田における前年のイネ縞葉枯病の発生面積率は12%（平成14%）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。

② 田植え時はヒメトビウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

③ 第2世代成虫は6月下旬頃に水田に飛来し、第3世代幼虫の発生最盛期は7月上旬頃と考えられることから、前年に縞葉枯病の発生が認められた地域では、この時期の幼虫を対象に追加防除を行う。

3. ツマグロヨコバイ

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭（平成：紀の川市0頭、上富田町0.2頭、那智勝浦町0.1頭）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 田植え時にツマグロヨコバイに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

4. セジロウンカ

（1）予報内容 発生時期 早い 発生量 並

（2）予報の根拠

① 県内の予察灯（紀の川市、上富田町、那智勝浦町に設置）への初飛来は4月30日（那智勝浦町、2頭）で、平成（5月27日）より早い。

② 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平成0.2頭）、上富田町0頭（平成0.2頭）、那智勝浦町3頭（平成0.1頭）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 田植え時にセジロウシカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

5. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町のいずれの地域も0頭（平成：いずれの地域も0頭、初飛来の平成：6月30日）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時にトビイロウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

6. イネミズゾウムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平成0頭）、上富田町3頭（平成25.3頭）、那智勝浦町12頭（平成15.0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イネミズゾウムシに効果がある育苗箱施薬剤を施用していないほ場で、田植え3～7日後に成虫による食害株率が30%あるいは成虫が1株あたり0.5頭を越える場合は、直ちに薬剤防除を実施する。

II. 野 菜

<ウリ科野菜>

1. モザイク病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培キュウリおよび露地栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率はいずれも0%（キュウリ：平成3%、スイカ：過去7年の平均0%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリおよびトンネル栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率はいずれも0%（平成：いずれも0%）であった。

③ アブラムシ類の発生は平成並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① アブラムシ類の防除を徹底する。

2. ベと病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月下旬の発生ほ場率は36%（平成43%）、発病葉率は1.3%（過去8年の平均6.8%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月下旬の発生ほ場率は33%（平成55%）、発病葉率は4.7%（平成12.1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。

② 薬剤防除は予防散布を重点に、薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. 褐斑病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月下旬の発生ほ場率は9%（過去8年の平均5%）であった。
 - ② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月下旬の発生ほ場率は83%（過去2年の平均85%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
 - ② 罹病葉や収穫後の残さは速やかに処分する。
 - ③ 資材に付着した病原菌の胞子が伝染源になるので、支柱等再利用する資材は栽培終了後に消毒する。ネットやマルチ等は更新する。

4. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月下旬の発生ほ場率は18%（平年23%）であった。
 - ② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月下旬の発生ほ場率は100%（平年80%）であった。
 - ③ 県北部の露地栽培スイカおよび県中部のトンネル栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は、いずれも0%（県北部、県中部ともに平年0%）であった。
 - ④ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 施設栽培やトンネル栽培では風通しを良くし、薬剤防除は薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

5. 疫病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
 - ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 薬剤防除は予防散布を重点に、6月上旬頃から定期的に行う。
 - ② ほ場の排水を良くし、マルチ、敷わらを行う。

6. つる枯病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
 - ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 梅雨期の降雨にともない株元から発病するので、薬剤散布にあたっては薬液が株元にも十分かかるように行う。

7. 炭疽病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0%（過去5年の平均0%）であった。
 - ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0%（過去5年の平均0%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 6月以降の露地条件で降雨が続くと被害が拡大しやすい。病斑上の胞子が雨滴などで飛散するため、薬剤の予防散布に努める。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培ナスにおける5月下旬の生息葉率は、モモアカアブラムシ0%（平成0.7%）、ワタアブラムシ0%（平成0.1%）であった。
- ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月下旬のワタアブラムシの発生ほ場率は100%（平成56%）、生息葉率は6.0%（平成6.1%）であった。
- ③ 黄色水盤（紀の川市）の5月1～20日の飛来数は137頭（平成163.7頭）であった。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培ナスにおける5月下旬のカンザワハダニの発生ほ場率は20%（平成9%）、生息葉率は2.4%（平成1.2%）、ナミハダニの発生ほ場率は0%（平成0%）であった。
- ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月下旬のカンザワハダニの発生ほ場率は40%（平成64%）、生息葉率は2.9%（平成13.6%）、ナミハダニの発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率32%、生息葉率6.3%）であった。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. ミナミキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培ナスにおける5月下旬の発生ほ場率は10%（平成25%）、生息葉率は3.6%（平成6.5%）であった。
- ② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月下旬の発生ほ場率は40%（過去4年の平均48%）、生息葉率は2.9%（過去4年の平均5.4%）であった。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
- ② 施設栽培では、栽培終了後に抜根した上で7～10日間以上施設を密閉してアザミウマを死滅させ、後作や周辺の野菜等での発生源とならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培ナスにおける5月下旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率6%、生息葉率0.7%）であった。
- ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率8%、生息葉率1.0%）であった。
- ③ 県中部の施設栽培キュウリにおける5月下旬の発生ほ場率は80%（過去4年の平均8%）、生息葉率8.9%（過去4年の平均1.4%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

5. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月下旬の発生圃場率は20%（平年4%）、生息葉率は0.3%（平年0.2%）であった。
- ② フェロモントラップによる5月1～20日の誘殺数は、紀の川市14頭（平年1.9頭）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 若齢幼虫を対象に初期防除に努める。
- ② 幼虫は作物の生長点付近の未展開葉の芯部に潜入するので、薬剤による防除効果が上がりにくい。初期は局部的に発生するので、管理作業時に見つけしだい捕殺する。
- ③ 施設栽培では、栽培終了後に20日程度施設を密閉して死滅させ、後作の発生源にならないようにする。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 5月下旬までに薬剤散布を実施していない園では早急（6月上旬）に防除を行う。
- ② マンゼブ剤またはマンネブ剤を用いる場合、1回目散布後の累積降水量が250mm程度となった時点で次の散布を行う。
- ③ 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）における春葉の越冬病斑の発病葉率は2.0%（平年12.1%）であった。春葉における初発は5月24日時点ではみられていない（平年5月24日）。
- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 銅水和剤の予防散布を行う。散布時には薬害軽減の策を講じる。
- ② 罹病枝葉の剪除と防風垣の整備に努める。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）における5月中旬の100葉あたり雌成虫数は0頭（平成2.0頭）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性対策としてマシン油乳剤の散布を励行する。マシン油乳剤の散布は発生初期に行なうと高い防除効果が得られる。

4. ヤノネカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生時期

第1世代1齢幼虫最盛期	5月21～25日	（平成6月1～5日）
同 2齢幼虫最盛期	6月6～15日	（平成6月16～25日）
同 雌成虫初発日	6月11～15日	（平成6月21～25日）

発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）での第1世代1齢幼虫の初発は5月7日（平成：5月17日）であった。
 - ② 前年10月における発生園率は8%（平成8%）、寄生果率は0.4%（平成0.4%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 多発園では、2齢幼虫最盛期にマシン油乳剤や有機リン系の殺虫剤を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察ほ場（無防除、由良町）における5月中旬の黄色粘着トラップによる誘殺数は40頭（平成41頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 地域での発生消長調査の結果を参考に、適期防除に努める。

6. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）では5月中旬の寄生新梢率は2%であり、各地域においても発生量は平成並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 各園地の発生状況を把握し、適期防除に努める。

<カ キ>

1. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における5月中旬の「富有」での発生園率は0%（平成8%）、発病葉率は0%（平成0.2%）であった。

- ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 伝染源となる病斑上の病原菌は、6月以降活発に形成され伝染を繰り返す。病原菌は葉裏の気孔から侵入するため、薬剤防除にあたっては葉裏にも丁寧に薬液を散布する。

2. 円星落葉病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 前年10月の「富有」における発生圃率は24%（平成41%）、発病葉率は1.0%（平成5.5%）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 病原菌の飛散は5月上中旬から始まり、5月下旬～7月中旬の降雨後に多い。二次感染はしない。
 - ② 5月から8月までマンゼブ水和剤、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

3. 角斑落葉病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 前年10月の「富有」における発生圃率は35%（平成76%）、発病葉率は2.8%（平成16.3%）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 病原菌による感染は5月上中旬から始まり、7月中下旬まで続く。二次感染を繰り返す。
 - ② 薬剤防除は、円星落葉病に準ずる。

4. カキクダアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における4月1日～5月15日の黄色粘着トラップによる誘殺数は0頭（平成9.6頭）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 防除適期は新成虫飛来期の6月上中旬である。

5. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における4月1日～5月15日の黄色粘着トラップによる誘殺数は1頭（平成6.4頭）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 防除適期は新成虫飛来期の6月中下旬である。

6. フジコナカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠

- ① 県北部における5月中旬の「富有」での寄生花蕾率は0%（平成1.0%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 樹体生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期である6月上中旬に薬剤を散布する。多発園では薬液を丁寧に散布する。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

- (1) 予報内容 発生量 多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における5月中旬の発生園率は100%（平成43%）、発病葉率は5.5%（平成1.8%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 防風ネット、防風樹の設置などの防風対策を励行する。
 - ② 平成30年度病害虫発生予察注意報第3号（5月11日発表）を参照する。

2. カイガラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における5月中旬のウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ雌成虫寄生枝の発生園率は10%（平成18%）、寄生枝率は0.2%（平成2.2%）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期の少し前に薬液を散布する。
 - ② 近年の第2世代ふ化幼虫発生盛期は、ウメシロカイガラムシが7月1～5日頃、クワシロカイガラムシが7月11～15日頃である。

<果樹全般>

1. カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 多
- (2) 予報の根拠
 - ① 紀の川市粉河の予察灯での5月中旬の誘殺数は、チャバネアオカメムシが1145頭（前年3頭、過去7年の平均20頭）、ツヤアオカメムシが205頭（前年19頭、過去7年の平均26頭）であった。
 - ② 有田川町奥の予察灯での5月中旬の誘殺数は、チャバネアオカメムシが651頭（前年0頭、過去4年の平均41頭）、ツヤアオカメムシが1389頭（前年11頭、過去4年の平均108頭）であった。
 - ③ みなべ町東本庄の予察灯での5月中旬の誘殺数は、チャバネアオカメムシが518頭（前年42頭、過去8年の平均144頭）、ツヤアオカメムシが5776頭（前年126頭、過去8年の平均398頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生および被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
 - ② ウメの被害は品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。
 - ③ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農

作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyohou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780